
恐怖の重石
ド・ベルディナント

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恐怖の重石

【作者名】

ド・ベルディナント

【あらすじ】

ガンダムファンの妄想二次小説です
一年戦争に逆行するオリジナル・ジオン軍人

第1話、0079、No. 1

宇宙要塞ア・バオア・クーに背を向けて、漆黒の宇宙を機動するジオン公国軍のMS-06R1が、右手に持つマシンガンを構えた。

ザクのコックピットにある照準機がジムのコックピットの脇を捉えた瞬間、パイロットのケネス・オドネルは、当たれと祈るような気持ちで引き金を引く。

ザクのマシンガンが正確に作動して次々と弾丸を放ったが、それより一瞬だけ速く、地球連邦軍のジムは回避行動を取り始めていた。

弾丸の大半は遮るものなく宇宙の彼方に消えてしまう。ジムの捉えた数少ない命中弾も致命傷を与えるには至っていない。

ケネスは逸る気持ちを抑えながら、無茶苦茶な機動を取るジムの後ろから追撃する。

再びザクの照準がジムを捉えたが、ケネスはジムの動きを予想出来る機会を待つことにして、すぐには引き金を引かない。

ジムのパイロットはケネスに行動パターンを読まれないよう努力をしていたが、どんなに優秀なパイロットでも背後に敵を抱えた状況ではミスをし易くなるものだ。

案の定、我慢比べに挑んでいたケネスの前で、ジムの方向転換が

一瞬だけ遅れた。

無論、ケネスはすかさずザクのマシンガンを発射して、ジムに複数の命中弾を連続して与えた。

被弾したジムはのたうちまわりながら部品を撒き散らし、コックピット付近からは炎を吹き出している。

敵パイロットの命を奪ったと確信したケネスは、引き金から指を離すと油断なく周囲を警戒しつつ、ゆっくりと深呼吸をする。

集中することによって研ぎ澄まされていたケネスの精神は、少しづつ緊張を解き、代わりに疲れを感じるようになっていた。

乱れた呼吸を落ち着けながら、ケネスは敵パイロットの腕を思い出していた。状況が少しでも違えば撃破されていたのは自分だったと心底思った。

あのジムは、ケネス率いるモビルスーツ中隊と地球連邦軍のモビルスーツ隊が交戦した際、真っ先に突進してきてケネスの中隊の06Fを一発で撃破して見せた。

ケネスの中隊の隊員の度肝を抜くような素晴らしいパイロットの手並みだったが、パフォーマンスに動じなかったケネスに先手を許すことにもなる。

とはいえ、ジムのパイロットもさるもの。ケネスの最初の一撃を

避けただけでなく、機体の体勢を崩しながらも長時間にわたって抵抗してケネスを拘束した。

敵の部隊で最大の脅威を打ち取って一息ついたケネスだったが、ゆっくりと休息出来る状況ではないと思っていた。

ミノフスキー粒子の妨害により戦況は分かり難いが、それでもケネスの中隊に所属するモビルスーツが、地球連邦軍のモビルスーツ隊とミノフスキー粒子下の接近戦を繰り返していることだけは明らかだった。

ケネスは休息を求める体からの欲求を振り払い、コクピットのモニターで近くにいないはずの僚機を探した。

一騎討ちの邪魔を排除する任務をきちんと果たしていた2機の僚機は健在であり、ケネスは安堵する。

すぐにケネスは僚機の06F2と06Fと合流しようと機体を動かした。

まず、経験の浅いパイロットの乗る06Fに接近して、同機と交戦しているジムに斜め背後からマシンガンを浴びせて撃破した。

「レント一等兵、良く頑張った」

「少佐、助かりました」

接触回線で真っ先に誉め言葉を掛けたケネスに対して、学徒兵という分類の新兵であるレント一等兵は、荒い息づかいをしながら礼を述べた。

「いや、私はアシストをしただけに過ぎん。あのジムは君の獲物だ。初陣で戦果とはついているなレント一等兵」

ケネスにしてみれば、レント一等兵のような新兵は戦力と期待していなかった。それが、長く敵モビルスーツを拘束して生き延び、ケネスに敵を叩く機会を与えたのである。十分に殊勲を受けるに値するとケネスは考えた。

「少佐、その、ありがとうございます」

「もっと誇って良いぞ……」

ケネスはそう言うと、モニターで別の小隊の危機に気づいて対応を思案した。

「私はラベア中尉の小隊の支援に回る。君は急いでモウル少尉に合流して欲しい。だが、決して無理はせず、少尉の敵の牽制に努めよ」

「了解です」

「その後は自分で判断するように少尉に伝えてくれ」

ケネスはレント一等兵にそう命じるとラベア小隊の交戦区域に向

か
っ
た。
。

第3話、0093、No. 1

『なんだ、あれは・・・』

ギラ・ドーガのコックピットに座っていたケネスは、モニターに映し出された光景を見て絶句した。地球に寒冷をもたらす死の天使となるはずだった小惑星アクシズが、不思議な輝きに包まれているように見える。

ケネスは大気による摩擦を真っ先に疑って排除した。地球に直撃するコースを維持しているとはいえ、アクシズはまだ地球の大気圏の遥か手前に存在している。それにアクシズを包む幻想的な輝きは、摩擦の輝きと全く違うものだった。

とはいえアクシズが輝こうと点滅しようと、地球に落ちればネオ・ジオンの勝ちだ。そう自分に言い聞かせて気持ちを落ちつかせようとしたケネスを、さらなる非常識な現実が襲う。

不思議な輝きにいざなわれたのか、アクシズが物理法則を無視して地球から離れるコースを取った。その非常識な光景を見たケネスは、敵の存在を忘れて呆けたようにアクシズを見つめ続けた。

本来なら危険極まりない行為だが、輝くアクシズはケネスだけでなくネオ・ジオン軍と連邦軍の双方から戦意を奪っていた。

それから間もなくして、アクシズと同じ輝きを纏う小さな物体が

ケネスのギラ・ドーガの前を横切った。

ケネスはその物体から何か意志のようなものを放っているように感じた。それと同時にケネス自身が戦場の気配を肌で感じ取れるようになり、ネオ・ジオン軍の置かれた立場に気づく。

『撤退するぞ』

ケネスはアクシズのすぐ近くで無防備に佇んでいたギラ・ドーガに近づくと、接触回線でパイロットに呼びかけた。

『オ、オドネル中佐。撤退するのですか』

若いパイロットが声を震わせて答えた。周りにはかなりの数の連邦モビルスーツがいる。本来なら生きて帰れないような状況だ。

『安心しろ。敵は戦意を失っているようだ。君が敵を刺激さえしなければ友軍と合流できる。機体を180度反転させたら武器を抱えてゆっくりと直進するんだ。そして最初に見かけた艦に着艦を申請したまえ』

『了解です』

激しい戦場となった空域は奇妙な静寂に覆われていて、敵味方のモビルスーツが何機も停止している。ケネスはギラ・ドーガの武器を抱え込み、戦う意志のないことを示しながら、近くの友軍機に接触する作業を繰り返した。

そして、彼はその空域に連邦軍機のみを残し、自らの母艦ベルデに帰還したのである。

第4話、0093、No. 2

「艦長、ご無事で何よりです」

ムサカ級巡洋艦ベルデンの艦長席に歩むオドネルに、副長のマラードが安堵の表情を浮かべて出迎える。ギラ・ドーガで総帥の行方を探しに行く前、ケネスは副長のマラードに今後の方針をいくつか相談して賛同を得ていた。

「ありがとうマラード副長。艦に問題はないかね？」

「別の艦に所属するギラ・ドーガ4機が本艦に着艦を求めたため、許可を出しました」

「今後を考えれば貴重な兵力だな。適切な判断だと思う」

「はっ。それから旗艦レウルーラから集結信号が届いています」

ケネスは総帥の安否を何故か絶望的と肌で感じていた。そして、旗艦レウルーラが総帥の無事を喧伝していないことは、それを完全に裏打ちしていると判断した。

「集結信号だけか。総帥の行方はいまだに不明のようだな」

「では？」

「ああ、作戦を実行する。周囲の行方不明者の搜索を打ち切り、まずは僚艦のマッザウに合流しよう」

「了解です……」

副長は齒切れの悪い話し方で答えた。ムサカ級巡洋艦マッザウとの合流に乗り気ではなさそうな副長に、ケネスは理由を尋ねた。

「何か心配でもあるのかね？副長」

「どうも、マッザウの被害が最初に旗艦へ送った発光信号の報告より大きいように思えるのです」

「言われてみればそうだな。本艦のように目的があるならともかく、集結信号に従わないことは変だ」

「はっ」

「だが、大した問題ではない。損傷によっては作戦に不参加の意志を持つ将兵を預かってもらえば良い」

ケネスはそう副長に告げると、今後の方針の一端を直属の部下達や拾った僚艦の将兵達に告げることにした。

「艦長より全将兵に告ぐ。諸君も承知の通り、地球の寒冷化して重力に魂を縛られた連中を肅清する作戦は失敗に終わった。しかも、総帥の安否は未だ不明である。この難局を、ネオ・ジオンは偉大な指導者抜きで乗り切れるかわからない」

「このような時、我々ジオンの理想を担う軍人たちは常に再興に必要な兵力の温存を図ってきた。今後のスペースノイドの自立のためにも、本職は新たな道を諸君に提示する。それは危険な任務であり、命をかける覚悟と無償の忠誠心が求められる。私は諸君の自発的意志を尊重するつもりだ。考える時間はあまりない。すぐに決断して上官に去就を申告して貰いたい」

ムサカ級巡洋艦ベルデンの将兵達に敗北感や絶望感はない。それどころかこの空域を覆う不思議な感覚が彼らの心を満たしていた。

「艦長、旗艦レウルーラより集結を急げと再び信号が届いています。いかなさいますか？」

「旗艦には、艦の補修と周囲で行方不明者を搜索してから合流すると伝えよ」

旗艦レウルーラの士官達に疑問を抱れないよう、ケネスは当たり障りのない返信を送った。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~3721

恐怖の重石

2013年05月29日 22時51分発行